

の高いものであった。参考文献も少ない僻地で、よくこれだけのものを書かれたものと驚くほかはない。時々この上夜久野の地を訪れたが、2階が仕事場であり、時には食事を2階に運ばせ、執筆しながら食事をされたようである。まだ還暦の前後であったが、「自分も年だ。別に運動をしなくても健康を害することもなからう」と言っておられた。健康には恵まれた方であった。

それにしてもこうした一連の仕事は、恐らくこれからも個人で実行できる学者は出ないことであろう。この小事だけでも、先生は桁外れの人であった。

敗戦後の十数年はこうした著述の中で送られた。ようやく世の中が改まったが、先生の大学復帰はついに実現しなかった。これには私の責任は重大であるが、いまここでその間の経緯を書く余裕はない。ただ私自身の寛容さが足りなかったことを深く反省していることを書き添

えておきたい。

先生の最晩年はまことに順風に帆をはらませた航海のようであった。独力で京都産業大学を設立され、総長として学校経営にすばらしい成績を挙げられた。停年でやめた京都大学の諸教授を集め、歴史の古い立命館や同志者に拮抗する大学に育てあげられた。そうした生前の功績は盛大な葬儀に象徴されるのである。

荒木先生は多才な人で、書も絵も上手であった。またなかなかのローマンチストで、叙情的な名文をよくされた。最初の欧州留学の時、目的地のドイツにはいる前に、イタリア各地をまわってシチリアにも足をのばされた。鷗外の『即興詩人』ばりの文章でお便りを頂いたのは、半世紀前のなつかしい思い出である。先生は道草を食いながら、結構普通人の2倍も3倍もの仕事をやりとげられた。やはり異常の人である。(1978.8.9)

荒木先生の思い出

——略歴補填の意も含めて——

清 永 嘉 一

京都産業大学の構内には、蟬しぐれの中、夾竹桃の桃紅色が今を盛りと咲き誇っている。この花が好きだった先生は今はない。先生とのお付合は40余年にわたり、戦前の京大宇宙物理学教室の時代、戦後の夜久野閑居、そして京産大の時代とそれぞれに思い出はつきない。請われるまま、回想の筆を執り、先生の霊に捧げる。

まず、先生の海外旅行について略歴の補足をしておきたい。ドイツ留学(昭和4年1月17日出発、シベリヤ経由で昭和6年5月22日帰学)中は、暇を見て西欧各地を勢力的に旅行され、その見聞記を奥さんやお子さんなどへの通信に丹念に書残されており、その際のスケッチも一部ではあるが絵巻物の形で残されている。ドイツ語の正当な勉強にはオペラが第一であるという、その言葉通りに、オペラもよく見に行かれたようで、その状況は奥さんなどへの便りに詳しい。字物教室時代には、昭和9年1月の南洋群島ローソップ島日食観測、昭和11年6月の北満(現在の中国東北部)呼瑪日食観測に遠征され、呼瑪日食観測後に上海自然科学研究所(所長は岳父新城新蔵博士)を訪問、昭和16年9月の中華民国漢口の日食観測にも指導者として参加、その間、昭和14年4月には日支事変で荒廃した南京紫金山天文台の復興に森川光郎(故人)、高木公三郎両氏らと共に協力された。京産大創立以後は、昭和40年7月に香港・マカオ;昭和42年2月に台湾台北;昭和42年8月には西ドイツ、スイス、イタリア、フランス、英国、米国、カナダ;昭和46年7月から2ヶ月余フランス、英国、西ドイツ、オーストリア、イタリア、マルタ共和国、米国;昭和47年5月には

東欧共産圏諸国;昭和48年9月にはコペルニクス生誕500年記念国際学術会議における記念講演(“Der Mensch und der Kosmos”)のため病を押してポーランドへ;昭和50年7月にはNASAの招待で米国へ;昭和51年5月にはBritish Councilの招待で英国にわたり、Azerbaijan研究所長の招きでヨーロッパ・ロシアの各地を;昭和52年4月韓国;同年7月には政府の招聘でニュージーランド及びオーストラリアへ旅行されているが、その多くは大学・研究所の制度・研究体制・教育の実状調査並びに文化交流を目的とするものあり、或は京産大世界問題研究所の若泉教授を伴って知名学者や思想家を訪問交歓されている。

昭和48年初夏の病気以後は自ら機能回復に努力され、本年6月29日には、京産大の天文学関係の先生方及び天文同好会の学生達と酒を酌み交しながら、「人間は限度を知って自ら節しなければならぬ」と気炎をあげ上機嫌だったし、これが先生と同席した最後になるうとは夢にも思わなかった。思えば、創設10余年の私立大学の創立者であり、総長であった先生には、精神的にも肉体的にも大きな負担がかかり、他方、大学の関係者も甘えて些細なことにも総長の手をわずらわすという不手際がなかったであろうか;先生は本年7月7日から9日まで北陸金沢へ出張し、7月10日には京産大本部で柏副総長らと会談、昼食を共にし、帰宅後も元気だったが、午後4時頃に背中を痛め訴えられ、午後7時すぎ大往生をとげられたのであった(病名は心不全)。当日、私は朝から大阪へ行き、午後9時40分頃に帰宅して悲報を知り、耳を

疑うと共に急遽馳けつけたが、先生の尊顔は安らかであった。幾つかの病気を背負った私がかどうか今日を過しているのに、立居に多少不自由ながら元気であった先生が忽然として逝かれるとは、会者定離の定めとは言うものの、悲しみに堪えない。

思い起こせば、昭和20年8月15日、日本はあげて安堵と動揺の、或は興奮と放心の不安定な坩堝の中であった。その午後、宇宙物理学教室にあって、私は辞めて出直すことを考え、先生も辞職を口にされた。辞表の書直しなどで時間をとったが、9月上旬には先生は一家をあげて、京都府下の天田郡上夜久野村へ移住された。夜久野ヶ原は京都府と兵庫県との境にあり、昔、宝山の噴火で生じた高原で、冬はスキー場となるその一角、茶堂の北の傾斜地に開拓の一步を押し、晴耕雨読の新天地を求められたのであった。9月半ば、私は九州へ旅立ち、福岡で栗原道德先生（当時は九大流体力学研究所教授、本年5月逝去）にお目にかかり、「辞めて、字物第一講座の後は宮本正太郎助教授に託す」との荒木先生の意を伝えた時、栗原先生は不満であったようだったが、その後、ゆっくりと話合われる機会もなく、既に早、両者共に此の世にない。恒星社の土居客郎（故人）氏を上夜久野村へ案内したのも昭和20年の暮近い頃であったように思う。昭和21年春、高木、清永が相次いで夜久野に入る。夜久野の春はわらび、ぜんまい、秋は柿、栗と自然の稔は豊かであったが、僅かに開いた山の畑に植えた豆や蕎麦を鳥獣に荒されたこともあり、地力に乏しい原野では大根の育ちも悪かった。京都府下の北海道と言われる夜久野は冬には膝を没する積雪あり、鍬は筆よりも重く、雉などの繁殖する原野の開墾は意の如く進まず、殊に昭和22年春の公職追放の後には、先生は次第に読書・執筆に時を過ごされる機が多くなって行った。或る時は、先生のお宅で原稿分担の打合せなどに時の過ぎ行くのを忘れ、隣村中夜久野村大油子の拙宅に帰るのに、夜中、東源寺の裏山を尺余の新雪に足を取られながら越えたこともあった。斯くして、先生の勢力的な努力で誕生したのが天文宇宙物理学総論の一連の著作であった。また、その時に集めた資料を基に、後で現代天文学事典が生れた。その間、昭和23年5月9日の日食の折には、手分けして部分食を村々の学童達と共に観測したこともあった。

昭和23年秋には私は兵庫県の東河村へ移り、夜久野ヶ原を越えて先生宅と行き来していたが、昭和24年の新制大学の発足に伴い、私は村を離れる日時が多くなり、翌25年には高木、清永共に京へ還らざるを得ない事態となった。これより先、山の開拓予定地が隣接の青年開拓団に侵食されることなどが起り、何かの折に、「体力的に無理はきかぬ、筆の力に頼るよりない」などと言っておられたのを聞いたような気がする。昭和26年8月の公職追

放解除後に、夜久野の教育委員をされたことがあり、当時、教員組合との論争などもあったかにかうかっている。そして、昭和29年3月、8年半にわたる夜久野隠棲に終止符を打ち、先生は家族共々京都吉田の自宅に帰り、その秋からは請われて大谷大学の一般教育の講義を担当、また、昭和32年4月からは京大大学院理学研究科の天体力学の講義を受け持たれた。昭和39年3月に大谷大学を辞められたのは京都産大の創設に専念するためであった。

昭和38年の極月に近い頃であったと思うが、藪内、高木、江本（故人）、芝原（故人）らと共に私も京都吉田の先生宅に呼ばれ、その席上、「京都産業大学」を創設する話を初めて耳にし、一同驚くと共に一抹の懸念を表明したことを覚えている。翌年に入ると、京都産業大学創立事務所を設置され、それからは文部省との折渉、京産大現在地（当時は国有山林）の払下げの件で農林省への請願、さらには創立資金の調達などに獅子奮迅の労苦を重ねられ、遂に、昭和40年1月25日、京都産業大学理学部・経済学部の設置並びに学校法人「京都産業大学」寄附行為が文部省より認可され、同年2月1日には京都産業大学学長（初代）兼理事長に就任されている。その間には、学園施設の工事、設備並びに人事に関し、先生には言うに言われぬ御苦労があり、種々雑音も入り、周囲の我々が勝手な注文をつけて創設者たる先生の足を引張ったようなことが再三あったように思う。

先生は専攻の宇宙物理学の他に、語学が好きで堪能であり、戦時中の大日本言論報国会の交友関係から社会問題や経済理論にも興味を持たれ、それが京都産業大学の学部及び研究所に端的に現われていると言って良いであろう。最初の集りの時から、名は産業大学であるが、その基礎となる理学部を置き、物理学科と数学科を設けること、さらには文学部ではなく語学部を設置すること強く主張され、席上一部の人から出された私学経営上の経済学部・経営学部の必要性に対しても理論経済学に重点を置く理想論を吐露しておられた。現実には、担当主任教授の人選難などから外国語学部の発足は少し遅れたが、迂余曲折を経て、現在の京都産業大学は理学部・外国語学部・経済学部・経営学部・法学部の五学部、学生数1万5千余の学園にまで成長した。私の所属する理学部では、宿老教授の引退に伴う後任人事などの問題で、この学期初めから総長と数回会い、一部は話を煮詰めつつあったところであった。先生は人事に関しては仲々慎重で、若い人の成長と学部内の和を考えておられた。しかし、妥協はせず、幾分独裁のきらいはあったかも知れないが、初志の理想を概ね貫徹されていたように思う。京都産業大学には、現在、世界問題研究所、計算機科学研究所及び本年4月に設置された国際言語学研究所が附置されているが、先生にも一つ理学研究所（仮称）を置

いて内外学者の交流をはかるといふ夢があった。また、本年 4 月半ばに私ら数名に財団法人新城荒木記念資料館の理事を委嘱され、その設立を急いでおられたのも、何か虫が知らされたのであろうか；それが届出の寸前で足踏みしていたと聞くに及び、仕上げの釘が一本抜けていた無念さが残る気がする。

京大宇宙物理学教室では、先生は宇宙物理学の講義並びに京大総長になられた新城先生の後を継いで天体力学の講義を担当しておられた。来朝したアインシュタイン博士の京大での講演の際には先生が挨拶されたとも聞いておるし、また、ドイツ留学時は恰も量子力学の完成期であり、帰朝後、京大で初めて量子力学の講義をしたと御本人が語っておられた。新城先生が雄大な構想の下に「宇宙物理学」を開設され、荒木先生はその学統を受け継ぎつつ、新しい天体物理学の分野での研究開拓に寄与；即ち、業績目録に見るように、最初の頃は短周期及び長周期の変光星の理論的研究を、そして留学後は新知識を導入して白色矮星の内部構造論を発表し、その後は栗原道徳講師（当時）を協力者に膨張大気を持つ恒星大気の理論的研究へ進まれた。この後期の研究態勢は宮本正太郎博士の仕事を経て、現在の宇宙物理学教室における研

究へと脈々と継承されている。また、戦時中の帝国学士院の委嘱による日本暦学史の研究があり、新城先生以来の東洋天文学史については、当時の東方文化研究所の能田、藪内両博士らと研修を重ねられ、天体力学の理論的考察の方面では、故芝原鎌一君を経て京産大の吉田淳三君の仕事へとつながっている。先生のも一つの関心事に宇宙構造論があり、戦時中には、電離層構造論や太陽に関する資料調査などにも手を伸ばしておられた。先生は新しいことが好きであった、例えば、エディントンの Relativistic Theory of Electron and Proton が出た時には直ちにこれを講義されたことがあり、また、他方、ペルーからの留学生のために英語で天体力学の講義をされ、最近では、京産大大学院生のため 6 月末まで懇切に講読の指導をしていただくなど、学生に対しては厳正俊敏であると共に親切であった。

最後に私事にわたって恐縮であるが、6 月中旬に私の不備な履歴書の書直しを命ぜられ、その資料集めも兼ねて 7 月 10 日には大阪へ行き、帰来、訃報に接したのであった。不肖の致すところ、先生御生前の最後まで御心労をわずらわし、誠に申訳なく、その後、整備して提出したことを書添え、先生の御冥福を祈りつつ合掌して筆を擱く。

今は亡き荒木俊馬先生

能 田 忠 亮

私たち平生荒木俊馬先生が、非常にお元気だったことを良く知っていたものにとっては、先生が急逝されたと聞いても、皆耳を疑ったに違いない、しかもその日の屋頃親しく先生の元気な話を伺ったものにとっては、同じ日の 7 月 10 日の夕頃の 7 時ごろ、先生が急に亡くなられたと急に知らされても、誰しも信ずることが出来なかったとしても無理からぬことである。

私が最近親しく先生にお目にかかったのは、6 月 27 日（木）、下鴨の生研グリルにおける昭和 53 年度京都産業大学天文同好会の席上においてであった。参集した教官は、能田・清永・井上・吉田・三好・原の 7 名、学生諸君の方は 14、5 名くらいだった。荒木先生は少々遅れてから見えられ、盛んに冗談をいい乍ら、「僕は総長としてではなく、同好会員のつもりで出席せよとのことであったが、それなら会費も少々ですむので有りがたい。今日は能田君の喜寿の祝を兼ねての会合だそうで、能田君お目出度う。今日は恰も家内（京子夫人）の誕生日で、義兄（夫人の兄君新城英太郎氏）と三人で祝酒をやりましてネ。二人とも君の喜寿に祝意を表していたよ」と大分ゴキゲンであった。そして此処がすんだら家まで飲みに来ませんかということだった。実は以前から色々お話も

あり、相談もしておき度いことがあったので、前期試験でも済んで少し暇になったら、ユックリと参上することになっていたので、今夜のところは御遠慮申上げたのであったが、これが永のお別れになったかと思うと、まことに残念なことをしたと悔まれてならない。

想起すると古いことながら、私が京都帝国大学理学部宇宙物理学科に入学したのは、大正 12 年（1923）4 月であった。荒木先生は此の年 3 月 26 日に、理学部宇宙物理学科を卒業され、その 9 月には助教授に任命された。私どもは此の荒木先生から天体力学を、大正 14 年（1925）11 月まで受講したものである。これがそもそも荒木先生との結びつきの始まりである。大正 15 年（1926）3 月に卒業して以来 53 年間からのおつきあいである。

特に私が一生を通じて忘れ得ぬことは荒木先生から受けた恩恵のことである。私が京大卒業以来十有餘年間、つまり東方文化研究所研究員時代に荒木先生から親身も及ばぬお蔭を蒙ったことを思い出す。今、拙著東洋天文学史論叢（恒星社版、昭和 18 年（1943）、10 月 28 日発行）に寄せられた序には、

理学博士能田忠亮君は余の学と酒の友なり、大正 12 年（13 年とあるは 12 年のまちがい）余が初めて京都大